早稲田商学第309号
昭和60年1月

アラン・小林秀雄・自然

野村圭介

I

アラン Alain というペンネームで名高いエミール・オーギュスト・シャルティエ Emile-Auguste-Chartier (1868～1951) は，ノルマンディ Normandie の田舎町モルターニュ・オ・ペルシュ Mortagne-au-Perche に生まれ，そこで少年時代を過ごした。「私はノルマンディの百姓らしくものを考えるのであって，都会人風にではない」[1] というのは後年の述懐である。周知のように，ノルマンディ地方は，フランス有数の豊かな農業地帯であり，とりわけ牧畜酪農業が盛んである。腕利きの獣医であった彼の父親は，およそ馬に関することならすべてを熟知している，との土地の評判だったが，一面また猛烈な読書家でもあって，天文学から聖者伝まで，あらゆる類の書物を好奇心にまかせて，手当り次第読破したらしい。『わが思索の歴史』“Histoire de mes pensées”のなかで，アランは，なつかしい思い出，というより彼の思想形成，人間形成にとってかけがえのない出来事としてこんなエピソードをしるしている。[2]

父はよく二輪馬車に乗せて私（アラン）を外に連れ出した。そのうちに私も手綱がさばけるようになり，筋力がつくに従って，父の獣医の仕事も手伝うようになった。手から手へ，手を使って manuellement——と，アランは言うのだが——私は多くのことを学んだ。ある日，父は前方を駈けて行く馬を指さ

し，「あの馬は片目しか見えない。わかるかい。」とたずねた。「めっかちなの。どうしてそれがわかるの。」「馬鹿だな，お前は。ごらん，片方の耳を。くるくる回しながら音を探っているだろう。そちら側の眼が見えないんだ。」父はまたある時，アメリカ人が土地の名産馬，ペルシュ種 race percheronne を多数買付けながら，いっこうに移植の実(じつ)が上らないわけをこんな風に説明した。「あちらには乾いた牧草がないからさ。じめついた牧場だと，われわれの馬は脚がやられ，つま先で歩くようになる。だから尻の形が不恰好になるのさ。」動物の形も丘の形みたいなものだな，と私は悟るわけだが，この現実のものの形に即した洞察——風土とものの形態との照応——は，的確でもあるし美しくもある。と同時に，そこには，何かわれわれを安堵させるもの，自然に則した実りある思考へと誘うようなものがある，と筆者は思うのだが。「アランは哲学者であるとともに詩人である」[3] とアランの教え子の一人でもあるアンドレ・モロア André Maurois は言って，こんな一節を引用している。[4]

起伏した土の小山の下方で，「何やらくねくねと曲りくねったもの」quelque chose de sinueux が見える。それは，持ち上っては曲線がもつれたり，ほどけたりする。いったい何なのか。と，やがて地中から立ち現れるように，二頭づつペアになった三組の牛が縦例をなして，姿を現わした。横に並んだ二頭の牛の角から角へとかけ渡した「木のくびき」joug，その曲りくねった形が，のろい歩みにつれて揺れて，最初奇妙な光景を呈したのだ。そしてアランはこうつけ加える。牛のくびきがうねりながら進むのを目撃した者は，昔ローマ人が，如何なる類の丘陵を「くびき」joug と呼んだかが理解できるであろう，と。

父親に関してもう一件。アランは非凡な生徒だった。文科系，理科系の双方の諸科目に常に抜群の成績を収め，一時(いつとき)はまわりの進めもあって理工科学校 Ecole polytechnique への進学も考えたが，結局は高等師範学校 Ecole normale supérieure に入り，卒業と同時に，直ちに哲学の教授資格試験 agrégation に合格した。その時の父親のせりふがふるっている。すなわち，「とはい

っても，お前はやはり相変らずの馬鹿だろうよ。」Peut-être que tu n'es tout de même qu'un imbécile.[5] 有難たい一喝と言わねばならないだろう。先の片目の馬と思い合せて，なかなか味わい深い挿話である。このような父親を持ったアランは幸せ者である。[6]

さて再び少年アランに戻れば，彼は郷土のカトリック系の学院コレージュ・ド・モルターニュ collège de Mortagne で初等教育を終えた後，そこから40キロほど離れた小都市アランソン Alençon にあるリセ・ダランソン Lycée d'Alençon（今日ではアランを記念してリセ・アラン Lycée Alain と改称）に，寄宿奨学生 boursier interne として5年間在学した。次いで高等師範（エコール・ノルマル）への入学準備のために，パリ近郊バンブ Vanves のリセ・ミシュレ Lycée Michelet に移って，3か年を過ごすのだが，そこで出会ったのが，彼が生涯の師，唯一の師と仰ぐ哲学教師ジュール・ラニョー Jules Lagneau である。我国ではほとんど無名に等しい哲学者ラニョーについては，まず紹介的な意味で名古屋大学の白井成雄氏の一文を借りたい。「当時の哲学教師は一般にカント的厳格主義の影響を受けていたが，ラニョーは中でも際立って自己に厳しく，内省的・ストイックな言行一致の倫理の人であった。その気になればおそらくは学位を得，著名な大学教授になりえた人であろうが，そのような華やかな道は選ばず，病弱の身をもちながら全身全霊リセでの哲学教育に専心し，生前まとまった著作は何一つ残さなかった。彼の講義草稿類は死後アランを中心とした弟子達の献身的努力によって，やっと日の目を見るに到った。」[7]

余りにもプライベートな問題にわたる思い出話や，打明け話の類を，語ることも聞くことも好まなかったアランは，自分の少青年期についても，ごく断片的な話しか残していないのであるが，彼が「群雲の中に精神 l'esprit を見た」，[8]「かつて出会った唯一の偉大な人物 le seul Grand Homme」[9] とまで言うラニョーに関しては，折あるごとに変らぬ畏敬の念をもって言及し，あまつさえ『ジュール・ラニョーの思い出』“Souvenirs concernant Jules Lagneau”

と題した一冊の本も著わしている。この深い敬愛の思いと高貴な精神の光にみちた書物によって，およそ百年の歳月をへだてて，われわれもまたラニョーその人と邂逅できるのである。

少し薄くなった髪の毛と剛いあごひげ。十年一日のごとく，時代遅れのくたびれたフロックコートに包まれた長身。姿勢はきわめて良い。アランは，まるでドームのように両眼の上にせり出した，思想家特有の秀いでた額にまず驚かされた。縦横ともに並外れて大きい頭部は，後ろにもぐんとはり出していた。よく動く眉の下の，常に生き生きとして鋭い，人を射すくめるような奥まった小さな眼。この顔の上部にすべての注意力が宿り，その余は善良さと頬笑みが領していた。小振な鼻と口，そして頭蓋に相応じた岩のように頑丈なあご。全体の印象は，強く，しかも美しい。その顔に，倦怠と疲労の影がさしたことは一度もなかった，とアランは言う。[10]

ラニョーは教壇に立つと，まずゴムひもでとめた一冊の黒い手帳をとり出して机に置き，時々近視の眼をしかめては，それをチラチラ眺めながら授業を進めた。その話し方から，ただちに率直さが，そしていかにも好もしい人柄がうかがえた。彼は決して雄弁ではなかったし，その講義はさほど理路整然としたものでもなかった。むしろ話し振りはたどたどしい，と言って良い。しばしば言葉はとぎれ，混乱する。たえざる試行錯誤と暗中模索。「思考 pensée は，訂正と反復をくり返して前進した。それは常に即興的で，師にとってもそのつどそれは新しいものだった。今，口から出た言葉が，すぐまた沈思黙考の対象となり，そこから驚くほど長い沈黙が生じた。その時，額には，血と生命が充満していた。」[11] そうした時だ，天の一撃のように，深い洞察をひめた短い言葉，「何か永遠の公式めいたもの」quelque formule éternelle[12] が発せられるのは。すなわち「われらがジュピター神の御神託」oracle de notre Jupiter[13] である。いわく「主観的認識などというものはない。」Il n'y a point de connaissance subjective.[14]「感覚は抽象物である。」La sensation est un

abstrait.[15]「絶対的真理は一つしかない，それは絶対の真理など存在しないということだ。」Il n'y a qu'une vérité absolue, c'est qu'il n'y a pas de vérité absolue.[16] あるいはまた「自己と万物が，あるかあらぬか，いづれかを選ばねばならぬ。」Etre ou ne pas être, soi et toutes choses, il faut choisir.[17]「完璧な幸福と完璧な論理，われわれはそれを断念した時，知らずしてそこに達する。」Quand nous renonçons au bonheur parfait et à la logique parfaite, nous y arrivons sans en douter.[18] 等々。

神託 oracle は，文字通り若きアランを震撼させたといってよい。しばしば難解なまでに極度に圧縮された師の言葉を，以来終生アランはたえず反芻し続けた，といって過言ではない。その固い宝石のごとき言葉は，普段にそこに立ち戻るべき彼の思想のいわば試金石ともなった。筆者はここで，こうしたラニョーの哲学的銘句とでもいったものの中から，本論のテーマと関連して特に一つをあげておきたい。アランは，『わが思索の歴史』の中で，数ある公式 formule のうちから，自分は何よりもこれを思い出すのだと断って，次のように述べている。「〈思考は測定者である〉La pensée est mesureuse. このラニョーの公式が私を俗流観念論 idéalisme vulgaire から守ってくれた。つまり測定 mesure は世界の素材のごときもので，世界が私に依存することをやめるのは，まさしく測定によってである。思考は，ゆえに，私を私自身の外に投げ出すのである。」[19]

もろもろの観念を巧妙にあやつるようなところ，論証に論証をつみ重ねながら滔々と弁じたてるところ，緻密な体系を組み立てて頭脳の優越を誇示するところ，およそこうした点はラニョーには微塵もない。彼ほどペダンチックであることからほど遠いものは少ない。もちろん，ほかならぬアランもそうなのだが。こんな愉快なエピソードが残っている。ある時誰れかの差し金で——察するにおそらく常日頃ラニョーの教授ぶりに忿懣やるかたない思いを抱いていた視学官 inspecteur あたりだろう——出版者から直接，哲学のテキストがど

っさり教室に持ち込まれた。それは，御墨付の哲学，いわゆる学士院哲学 la philosophie d'Institut に忠実にのっとった教科書だった。哲学のAからZまでを，手際よくまとめて叙述した（さしずめ小林秀雄なら，手袋をはめた手で，[20] と言うところだろう）概論書である。ラニョーは，山とつまれたテキストを見るなり，一言もいわずに，それらを物置にほうり込んで，鍵をかけてしまった。[21]

たしかに，ラニョーの講義はいささか型破りだった，といえよう。彼は年間を通して，常に二つの主題しか扱わなかった。一つは知覚 perception について，他は判断 jugement について。これはまた，アラン哲学の二大題目でもあるのだが。ラニョーは，決して倫理 morale の問題を論じようとはしなかった。彼自身の生き方が，十分その範をたれてなお余りあったのである。[22]

教科書も一風変っている。例のゴムひもでとめた黒い手帳でなければ，かならず，スピノザ Spinoza かプラトン Platon，この二人の著作が，くり返し徹底的に読まれた。もちろん，それぞれラテン語とギリシャ語の原典によってである。そして，白墨（チョーク）や，インク壺や，立方体をなした白墨（チョーク）ケース。たびたびこうした物体が，知覚の問題をめぐって分析の対象となった。いつも実際の例が問題とされたのだ。彼は普段に，物に向い，物に問いかけることをやめない。常に事物において，事物にそって考えること，思索を現実の固い地盤から遊離させないこと。インク壺やチョークケース，それは自分にとって「神聖な実例」exemples sacrés[23] なのだ，とアランは言う。「そこにはいかなるペテン piperie もない。喝采を博するような，いかなる学説 doctrine の開陳もない。あるのは，例のインク壺とチョークケース。見るとは何か，触れるとは何か，聞くとは何かの厳密な分析だった。英雄的ともいえる遅々たる歩みと，やはり英雄的混乱。」[24] ラニョーはまたしばしば，思索するという仕事も，鍛治屋仕事を習うように学ぶもんだと言ったらしい。[25] アランは，この聖者のように厳格な師のすべてに，心底感嘆し，師を「模倣しよう imiter と決意した」[26] と

告白している。「私は彼から，物に密着しながら，なおかつ思想であるような一種の分析を学んだ。」J'ai appris de lui un genre d'analyse qui adhère à l'objet, et qui est de pensée pourtant.[27]

ラニョーについて，いささか筆を費やしたようでもあるが，一つしめくくりの意味で，とても良い話を紹介しておきたい。これは，名著『ジュール・ラニョーの思い出』の中でも，もっとも筆者の愛するくだりでもある。

ラニョーには，一つの観念 idée から他の観念をつむぎ出すような点，弁証法的 dialectique なところはいささかもない。彼の哲学はまず何にもまして，そしておそらくは専ら，知覚の理論であったと言える。これは自然そのものが彼に教えたのであろう。アランはこう前置きしながら，こんな話を始める。[28] ある日，師の部屋を訪れると，師は窓から，石工たちの使っている巻揚機(ウインチ)を示して，「眼が悪いのもなかなかいいもんだ。ごくつまらんものが，謎めいて見えてくる。何時間も注意をこらしたあげく，はじめて僕は巻揚機(ウインチ)というものがわかったよ。」巻揚機(ウインチ)はごく単純な機械だし，またあらゆる機械類の基礎と言って良い。「先生のこの神託 oracle がなければ，私は巻揚機(ウインチ)など馬鹿にして，もっと複雑なやつに興じていたことだろう。」以来アランはこの素朴な機械を見かけるたびに注意をこらし，そのつど何か発見した。「もし私が博士論文 thèse doctorale を書いたとすれば，——思考するためにはあらゆる実例が有益であること，かつもっとも単純でもっとも平凡なものが一番有益であることを明らかにするために——それは，綱の結び目 les nœuds de corde についてであったろう。これは，よく見れば，組み合された巻揚機(ウインチ)なのだ。とはいえ，あの神託がなければ，私という人間は，だめになっていたと思う。あの悪魔的な小器用 la diabolique facitité によって。」と，アランは言って，何事も易々と要領よくやってのける利口振りによって，いかに多くの者が身を滅ぼしたことか，と嘆くのである。

いかにもこれはアランらしい，なかなか味のある話だと思うのだがいかがで

あろう。さて最後にアランはラニョーを自分に引きつけて，――いくぶん引きつけ過ぎるきらいがなくもないが，次のように断言している。「彼は，この世界以外にはいささかの支えも持たず，常に証拠を手に握りながら思考した。確信をもって，人間としての自分の場所を堅固にして。普段に掘り下げ，普段に発見をしながら。周りの世界と己れとに，十分に豊んで。しばしば彼は，私の眼には，大地の守護神 le Génie de la Terre のように映じた。」[29]

II

「アランは，身近な問題から素材をとり，日常のことばでものを考える。その感じ，思い，考えつつあるところを，私たちのまえにそのまま提示する。だから，私たちはそこで，哲学の〈現場〉に接することができるわけだ。」これは，今日の我国の代表的な哲学者の一人と言って良い中村雄二郎氏の言葉であるが，氏はつづけて「アランは，古来の多くの哲学者たち，すなわちプラトン，アリストテレス，スピノザ，ヘーゲル，コント，そしてとりわけデカルトから多くのものを学びながら，みずからは断固として体系をつくろうとしなかった。」[1] と述べている。まさしくそうなのだ。アランほど「体系」système を嫌悪し，断固として体系を拒絶した哲学者はほとんどその類がない。何よりもそれは，彼の著作を一瞥すれば直ちに了解できる。アランと言えば，まず「プロポ」propos である。彼は生涯，無慮五千篇にものぼるプロポと称する短文，極く短かいエッセイを書き残した。このおびただしい量のプロポの中から，テーマ別に選録したのが，『幸福についてのプロポ』“Propos sur le bonheur”，『宗教についてのプロポ』“Propos sur la religion”，『教育についてのプロポ』“Propos sur l'éducation”，『人間素描』“Esquisses de l'homme”，『経済に関するプロポ』“Propos d'économique”，『政治』“Politique”，『精神の季節』“Les saisons de l'esprit”，『感情，情熱，しるし』“Sentiments, Passions et Signes”，『文学に関するプロポ』“Propos de littéra-

ture”,『美学入門』“Préliminaires à l'esthétique” 等々である。これらプロポ集は，数あるアランの著作の中でも，もっとも人口に膾炙したものだが，上記のタイトルを見ただけでも，いかにその内容が多彩であるかがわかろう。森羅万象人事万般，アランの確乎としてかつすこぶる柔軟な思索の対象とならなかったものは何一つない，といって過言でない。プロポこそまさしく，中村氏のいう「哲学の現場」，思索の現場そのものであろう。

断章形式の愛用——というよりむしろ偏愛，偏執といった方がよいかもしれないが——は，ひとりプロポだけにとどまらない。例えば小林秀雄の訳で名高い『精神と情熱に関する81章』“Quatre-vingt-un chapitres sur l'Esprit et les Passions”。これはタイトルそれ自体が断章形式を明示しているが，その前書きに，——小林訳で引用したいが——「私が今まで世に発表してきた数々の短章に，類別もなければ秩序もないのが気に食はぬといふ読者がある様だ。」そこで一つ試しに「哲学概論」Traité de Philosophie めいたものを書いてみた次第だが，しかし「そんな表題は，ちと大袈裟すぎると思つたし，それに完全なものにしやうとする考へ，この考へが実に多くの書物を汚がしてゐるのだが，さういふ不吉な考へに誘はれて，自分が知り抜いた事柄の埒外に歩き出すやうな事になりはしないか，といふのが一番心配だつたので，題も穏やかなものを選んだ」[2] とある。他にも例えば，『思想と年齢』“Les Idées et les Ages”,『神々』“Les Dieux”,『マルス，あるいは裁かれた戦い』“Mars ou la guerre jugée” などから，『プラトン』“Platon”,『デカルト』“Descartes”,『バルザックと共に』“Arec Balzac” 等のモノグラフィー，作家論的なものに至るまで，彼の著作は多かれ少なかれすべてが断章の積み重ねでできている，といっても良い。ほとんど唯一の例外として『諸芸術の体系』“Systèmes des Beaux-Arts” があるようだ。しかし，注意するがいい。タイトルにまどわされてはいけない。著者は同書のはしがきで，この本は諸芸術についての「短かい論文の集まり」un recueil de courts articles であって，けっして

「体系的秩序」ordre systématique に余儀なく従うものではない。「ここに示されたさまざまの考えは，あらかじめ措定された何か上位の考えに依存するものではなく，またわずかの言葉をもって全芸術を定義しうるような何かある普遍概念に導くことすらしない」[3] と，明言している。あえてアランが，「体系」というタイトルを冠した著作もまた，断章形式から成り立っているのは，なかなか面白いことだ。

断章による体系の拒絶は，しかし単にその著作の形式面においてだけ顕著なわけではない。内容というか，書き方，書き振りも，体系的であるどころか，はなはだ断片的といえばいえる。彼の筆はすこぶる即興に豊む。右にとび左にそれる。大きく迂回するかと思えば，いきなりゴールに直進する。くり返しが多いと思えば，とんでもない飛躍があって人を面喰わせる。その余りにも自在な筆は，しばしば読者の足をとめ，頭をかかえさせる。しかしこれも，あらかじめ整えたプランに則って書くことをしない，一気に筆をやって加筆修正をしない，というのがアランの鉄則であればいたし方なかろう。彼によれば，真に散文の名に価する散文は，弁論，説教，講演などに通有の「あの予備的区分 division préliminaire，要約 résumé，原理の喚起 rappel de principe[4]」等を拒む。つまり「論理関係 liaisons de logique を多用するのはペダンチックなのである。」[5]

ともあれ，アランの文体の何と魅力的なことか。まるで厚板に喰い入る鑿(のみ)のように，鮮やかな精神の軌跡を描くその筆致。だが彼の鑿はけっして鋭きにすぎる，とは言えないようだ。「よき細工は少し鈍き刀を使ふ。妙観が刀はいたく立たず。」というのは，小林秀雄が『無常といふ事』所収の「徒然草」に引用した兼好法師の有名な言葉だが，アランの文もまた，いささか「鈍刀を使って彫られた」[6] 名文という気味合がある，と思うがどうであろうか。なるほど，その筆は容赦なく問題の核心に，ずばずば切り込むのであるが，鋭い気迫にしばしばわれわれはたじろぐのであるが，どう言えばよいのか，妙に暖かいので

ある。アランという人間の大きさというか，万物への愛情を，心の広さを常に感じさせるのである。

閑話休題。アランの体系への不信，嫌悪については，秀れたアラン研究家ジョルジュ・パスカル Georges Pascal 氏も指摘しているように，[7] 確かにジュール・ラニョーの影響が大きいであろう。ラニョーから，物に則した思考を学んだ，とは彼のくり返し説くところである。机上の空論であってはならない。理論のための理論であってはならないのだ。観念をもって世界をおおうことはできない。これはけっして観念をいやしめることではない。そうではない。観念は常に現実の事物との係わりにおいてあるべきなのだ。それはあくまでも，現実を，世界を把握する手段，道具なのであって，観念自体が独立独歩して，世界にとって代ることはできない。「私は観念 idée を，経験世界の対象をとらえる道具，いうならば pince（ピンセット，クリップ，ペンチ等の物をはさみ，つまむ道具を総称して pince という。日本語に一語でもってこれに代わる語はない）としてのみとらえてきた。」[8] と，アランは言う。あらかじめ設定した，何らかの上位概念から次々と観念をつむぎ出して，森羅万象を説明解釈することなど所詮不可能だ。君は概念の網を池に向って打つ，しかし魚はかならず網目から逃れるであろう。

そもそも体系は，それがいかなるものであれ，首尾一貫性を備えること，堅固な統一体であることを欲する。体系は，何よりも体系内の整合性を重んじる。諸観念が，もろもろの要素が，相撞着することなく前後一貫していることを尊ぶ。矛盾を認めない。反対を認めない。立止って考えることを許さない。脇見を許さない。まるで巨大なローラーのごときものだ。凸凹はすべて一様にならされ，虫けらや草花のたぐいは，ことごとく圧し殺されてしまう。自己完結的な体系，閉鎖的体系，それは精神の牢獄である。アランの言葉を借りれば，「体系は精神の墓場である」Les systèmes sont les tombeaux de l'esprit.[9]

体系と関連して注目すべきなのは，アランの，議論，論争，論証，証明とい

ったものへの，警戒，不信である。いうまでもなく，思想体系であれ理論体系であれ，すべて体系なるものは，論理を緻密に組立てて，己れに真があること，分があることを証明しようとする。論証を積み重ねながら，何が何んでも相手を説得しようとしてかかる。論戦なら負けない，理屈なら負けない，というのが体系的精神である。アランは，これが気に食わない。確かな事物から離れて，しかと二本の足で踏みしめた大地を離れて，思考することほど容易なことはない。またこれほど空しいこともない。理屈はどうにでもつく。またどうにでもつく，というのが理屈というものだ。なぜなら，それはもともと確固とした実質を欠いているから。理はけっして全服の信頼をかち得ることはできない。理はかならず理を呼ぶ。反発を買う。「論争 polémique というものは，けっして人を教えるものではない。」[10]「私は論争することを恥ずべきこと honteux だと考えていた。それは恥ずかしいこと，正しい判断をくるわせるものだ。そして，あの知的労働者 travailleur intellectuel なる連中のことを考えるたびに，どれほど苛立たしい思いに駆られたことか。彼等は普遍的概念 ideé gérérale と自ら称するものを保持していると信じこみ，巧みにそれを適用しては，観念の配列 arrangement を，思想だなどと考えている。」[11] まことに結構なことである，おめでたい連中である，とアランは皮肉くるわけだが，このあたりで，一つ小林秀雄の言葉を借りたい。「アランなどを読んでゐて，いつも僕が感服するのは，彼の思想の頂と人生の瑣事との間を，一本の糸がしつかりと結んでゐる点だ。いろいろな観念を小分けにしてみたり，重ね合はせたり，組合せたりする様な仕事は，彼の興味を，まるつきり惹いてゐないといふ点だ。」[12] アランは断言する。小利口な理屈はもうたくさんだ。口角あわをとばす論戦など願い下げだ。「考えることは叫ぶことではない」 penser n'est pas crier[13]，「私は，黙って，未知の読者のために書く。」[14]

理を並べて，人を説き伏せようとしないこと。論証を重ねて，相手を理の牢獄の中に閉じこめないこと。常に風通しをよく保つこと。肝腎なのは，何にも

まして大切な自由，精神の自由を常に堅持することである。「説得しよう convaincre としてはならない。ただ刺激し stimuler，目覚めさせる réveiller のだ。」[15] これはアランの教育法の要訣である。また，ラニョーのそれでもあった。大切なのは，物に則して思索のきっかけを与えることだ。おのずから相手を発見へと導くことだ。

論証しようと思えば，何事であれ論証できよう。むしろ困難は，正しく問を立てることにある。正しく問を提出すること，すなわち proposer することにある。動詞 proposer と，ほかならぬプロポ propos との関連はもはや指摘するまでもなかろう。「何一つ証明しよう prouver などとは決してせず，可能なかぎり差し出し exposer，説明しよう expliquer とする」[16] こと。しかし，結論を急いではならない，解決をせいてはいけない。アランは，自分は解決というものを常に軽蔑してきた。反論とか解決とかいうものには，いつも砂をかむような思いを味わった。といった風に述べて，「いかにももっともらしくて，まるで不安定な（諸観念の）結合 combinaison，これが常に私に最大の不信を抱かせた。論証 argument も反論 réfutation も嫌いだ。私はただ，自分がよく知っている，一種の曖昧模糊としたもの un genre d'obscurité が好きだ。それはちっとも空虚ではない。それどころかとても充実したものだ。私はそれに何度も何度もぶつかる。決してそれを突き破ろう，などとあせったりはせずに。むしろ逆に，いささかも突き破れないことを確信して，それに安んじて。」[17] 素晴らしい文章だ。なんともアランらしいではないか。このような文章を読むと，まったくうれしくなる。何か力のごときもの，勇気のようなものが身内からわいてくる。一種模糊としたもの，曖昧なものを愛すると彼は言う。いったいそれは何だろう……この自然界のもろもろの事物，あるいは，すでに確固とした物の相貌を帯びた，芸術作品，思想や文学の古典……

同じような思想を，われわれは小林秀雄（1902～1983）に見ることができ

る。もっともらしい観念の図式でしかないもの，単なる知の合成物でしかないもの，そうした安易な思想——これをも思想と呼ぶならば——の不毛性，堕落については，小林もまた，折にふれ随処で，時にはげしく，時に諄々と説いてきた。晩年の大著『本居宣長』にも，それははっきりとうかがえる。小林は「この誠実な思想家は，言はば，自分の身丈に，しっくり合った思想しか，決して語らなかった。」[18] と述べながら，「宣長の述作から，私は宣長の思想の形体，或は構造を抽き出さうとは思はない。実際に存在したのは，自分はこのやうに考へるといふ，宣長の肉声だけである。出来るだけ，これに添つて書かうと思ふから，引用文も多くなると思ふ。」[19] といった風に，自らの方法論をまず明らかにしている。今不用意に方法論という語を使ったが，おそらくこうした生硬な言葉，われわれの血と膏(あぶら)のしみこんでいない言葉は，著者の顰蹙を買ったであろう。デカルトの有名な "Le Discours de la Méthode"，『方法叙説』の訳名で長く世に通行しているこの本を，「私のやり方」[20] と砕いて訳した方がいい，と言う小林であってみれば。

さてその畢生の大著において，彼はまず，宣長に先行し，宣長を準備した江戸時代の学者達，中江藤樹や伊藤仁斎や荻生徂徠といった儒学者，さらには契仲や賀茂真淵といった国学者を強い共感をこめて描出している。彼等は皆，あるいは『論語』や『孟子』を，あるいは『万葉集』をといった風に，古典を文字通り韋編三絶，読書百遍，これを熟読玩味，熟読精思して，それぞれ独力で己れの学問を築き上げた。藤樹の強い言い方を借れば，彼等は自力でそれぞれの学問を「咬出し」[21] た。これら近世の学問界，思想界の「豪傑」[22] の中から，ここでは仁斎や徂徠，とりわけ後者について筆を進めながら，小林の意のあるところを少しく汲んでみたい。

周知のように，当時の公けの学問は，いわゆる朱子学，宋学であった。これは別名「理学」とも称されたように，はなはだ理屈の勝ったもの，思弁的性格の強いものであった。さて小林秀雄の，『考へるヒント』という総題のもとに

集録された各篇は，大作『本居宣長』のいわば副産物といってよいもので，それだけに作者はいつになくのびのびと筆を遣っていて，どれもなかなか楽しめるエッセイなのだが，中に「好き嫌い」，「学問」，「徂徠」，「弁名」，「考へるといふ事」「哲学」「歴史」「物」等々，仁斎や徂徠にふれて書いた幾篇かがある。これらはすべて，年来筆者の愛読してやまぬものばかりだが，その中の一篇で小林は，「仁斎は，当時の学問の習慣に従い，朱子学を学んで，深くこれを極めたが，やがて，要するに豪さうな理屈に過ぎぬではないか，と悟つた学者である」[23] といった具合に述べている。仁斎の学問の道は，『論語』や『孟子』を熟読することに尽きた，と言える。何はともあれ，ひたすら本文を読んで読みぬく。その文勢を身をもって味わう。もっともらしい注釈を去る。「学問は形のない意味や義理から這入つてはならないのである。」[24] 卑しきを忘れ，日用をおろそかにして，いたずらに高等の議論に耽ける宋儒に対する仁斎の不信は，例えば『童子問』を一読しても良くわかるのだが，小林はこのように言う。「或る成心や前提を持つて，書を料理しやうと，書に立ち向つて」はならぬ，仁斎は「精読，熟読といふ言葉とともに体翫といふ言葉を使つてゐるが，読書とは，信頼する人間と交はる楽しみであつた。論語に交つて，孔子の謦咳を承け，〈手の舞ひ足の踏むところを知らず〉と告白するところに，嘘はない筈だ。この楽しみを，今，現に自分は経験してゐる。だから，彼は，自分の論語の註解を，〈生活の脚註〉と呼べたのである。」[25]

徂徠は仁斎の後継者である。彼の朱子学，理学への反発は，より断固としたものになる。常住不断彼は，「書ヲ読ンデ，理ヲ求メル」「書ヲ読ンデ理ヲ講ズル」[26] のは，学問の邪道であると公言してはばからなかった，という。「学者どもは，理といふ酒を食らつて酔ひ，口を開けば，道徳仁義天理人欲の管を巻く。聞いてゐると反吐が出さうだから，琴を弾じ，笙を吹く事にしてゐる。」[27] 小林秀雄は，「一理のうちに収つたこの世の如きは死物である。」[28] と断言して，徂徠の言葉をあげる。「一定ノ権衡ヲ懸ゲテ，以テ百世ヲ歴話スルハ亦易々タ

ルノミ。」[29] そもそも「理ハ定準無キモノ」[30] なのだ。「理屈はどうでも付くとは，理屈本来の性質なのであり，理は独り歩きして，世界に無之ところに行つても，理は理なのである。」[31]

ところで，物を重んじるというのは，確かな物に基づかない思考は空漠たる夢想の域を出ないとは，すでにくり返し記したように，アランの根本的な思想であった。例えば，芸事一つとって考えてみるがいい。「芸を学ぶものにも教へるものにも，物といふ条件は自明であらう。物といふ〈条件〉に，当方の意のままに決してならぬその〈節度〉に添はうと努めなければ，芸を身に得る事は出来ないのは，解り切つた事であらう。」[32] これは小林秀雄の言葉である。さてそこで『大学』のあの有名な，致知在格物（知を致すは物に格（いた）るに在り）。すなわち，格物致知であるが，当時の宋儒はこれをやかましくいった。しかし徂徠は，宋学のいわゆる窮理主義というものを，はっきりと拒否した。「格物とは，元来，物来るの意であつて，学者達が皆誤解してゐるやうに，物を窮むの意ではない。物の理を窮めて知を致すといふやうな安易な道を行くから，物が理に化けるのである。せつかく物が来るのに出会ひながら，物を得ず理しか得られぬとは，まことに詰まらぬ話だ，とするのが徂徠の考えだ。物来る時は，全経験を挙げてこれに応じ，これを習い，これに熟し，〈我ガ有ト為セバ，思ハズシテ得ルナリ〉といふ考えだ。」[33]「学者は，ひたすら身にとりて思ふ事を努めればよいので，何も思惟自体に細工を施す事はない。何を思ふかといふ確かな対象が，あれば足りるのだ。我が身にとつて思ふこれといふ確かな物があれば，古人も言つたやうに，〈之ヲ思ヒ，之ヲ思ヒ，之ヲ思ツテ通ゼズンバ，鬼神マサニ之ヲ通ズベシ〉で不足はない，それが，学問の道だ。」[34] 物ということに関して，小林が宣長にふれて書いているところも，中々面白いので，ついでに引用しておきたい。『考えるヒント』の「考へるといふ事」からだが，宣長によれば「かんがふ」は「かむかふ」の音便だったらしい。「か」は単なる発語だから，つまり「考へるといふ言葉は，もともとむかへるといふ言葉なの

である。物を対ふ，物を向うという意味合ひで使はれて来た言葉なのだ。〈むかふ〉の〈む〉は身であり，〈かふ〉は交ふである。従つて，考へるとは，単に知的な働きではなく，基本的には，事件に身を以つて交わる事だ。物を外から知るのではなく，物を身に感じて生きる，その経験をはつきり意識するといふ事だ。」[85]

筆者は，アランについて筆を進めながら，時に一言二言，また時にいささか筆を費やして，小林秀雄に言及してきた。アランは，いうまでもなく，若き小林秀雄を魅した西洋の神々，ボードレール Baudelaire，ランボオ Rimbaud，ヴァレリー Valéry，ベルグソン Bergson，等々と並ぶ，フランスの神々の一人である。彼が昭和11年，34歳の時に訳した『精神と情熱に関する81章』"Quatre-vingt-un chapitres sur l'Esprit et les Passions." は，十分にこなれた小林自身の文になっているし，またこれは我国における最も早いアラン紹介の一つでもある。さらに『芸術二十講』"Vingt leçons sur les beaux-arts,"『定義集』Définitions,『神々』"Les Dieux" 等は，彼が晩年に至るまで手元から離さなかった，数少ない洋書の中に数えられよう。[86] 当然，影響はあるであろう。それは，そうなのだ。しかし筆者は，あまりここで，影響云々を言いたくはない。ほかならぬ小林秀雄の言い草を借りれば，「影響といふ便利な言葉を乱用し」[87] たくない。むしろしばしば，その空しさを思う。考えてみればいい。いや，別に頭をひねる必要はないだろう。二人の文章を，一つはフランス語，一つは日本語の文を，各々一頁でもよい，虚心に読んでみれば，耳をすましてその「肉声」を聞いてみれば，二人がどれほどにも異なった文体を持つか，異なった文勢を持つかがわかるだろう。ほとんど長調と短調ほどにも違う。二人がまるで別の個性，別の資質であることがわかるだろう。時代も環境も風土も違う。伝統も違う。が，それにもかかわらず，この二つの偉大な精神は，というより私が愛読してやまぬ二人は，時に，いやしばしばと言っても良

い，その声を唱和させる，応和させる。その様を，筆者は美しいと思う。その照応を，うれしく感じる。以下アランに則して，自然をテーマとしつつ，折にふれて，小林の声にも耳を傾けてみたい。それはまた，いくぶん，例えばプルースト Marcel Proust が次のように言う意味合いにおいてでもある。

『失われた時を求めて』A la recherche du temps perdu の第五篇『囚われの女』La prisonnière の冒頭で，プルーストはこんなことを述べている。一個の人間を形づくっている多くのものの中で，最も本質的なものは，かならずしも一番人目に立つものではない。すぐそれとわかるものではない。たとえ病気で自分を形成するものが，次々と倒れていった後でも，「なお他のものよりもねばり強い生命力を持った，二，三のものが生き残るだろう。とりわけ二つの作品，二つの感覚の間に共通の部分を発見した時はじめて幸せに感じる一種の哲学者が。」[38] 彼はまた，『サント・ブーヴに逆って』"Contre Sainte-Beuve" の中でも，同様のことを，美しい比喩を用いて述べている。秋に，もはや花も葉も散りうせた秋に，ふたたび裸の自然に返った秋に，しばしば自分は，土地の，風景の，最も奥深い和合 accord を感じる。あたかもそのように，時に自分は，二つの思想や作品の間に強いつながりを，奥深い照応を，深いきずなを感じるのである，と。[39]

III

アランにあっては，まことによく，世界の存在，外界の実在が信じられている。それは実に，小気味よいくらいだ，と言っていい。外界は厳としてある。直観としてある。経験としてある。理屈なしにある。すべての理，あらゆる理の働きを超えて存在する。「存在するとは，大したことなのだ，それはありとある道理を圧倒する。」Exister, c'est quelque chose; cela écrase toutes les raisons.[1]「いかなる道理も存在を生むことは出来ない。」Aucune raison ne peut donner l'existence.[2] まず第一に世界がある。われわれの主観に関

係なしにある。それは可能，不可能の問題ではいささかもない。厳然とした事実なのだ。すべてはそこから始まる。これ以外の出発点はない，とアランは考える。「私が私自身にとって実在するのは，私がまわりの世界を認識する限りにおいてである。言葉をかえれば，世界から切り離された私の実在は，抽象的 abstrait かつ仮構的 fictif な存在にすぎない。」[3]

半ば冗談めいた口調で，アランはよくこんな風に語る。外界の実在に疑いをさしはさむような言が飛び出せば，直ちに私はその場から退散する。確固として存在する世界に，疑問を呈するかのごとき文字を見れば，直ちに私は本を閉じるのだ，と。[4] かく言うアランにとって，18世紀のイギリスの哲学者，ジョージ・バークリー George Berkeley ほど格好な揶揄の対象はない。周知のように，バークリーは，ごく簡単に言えば，主観的世界以外に世界は実在しないと考えた。すべて外界は，もろもろの事物は，観念としてのみ存在するとした。「羅紗は緑色ではない，緑色の感覚は君等のなかにしかないから。同様に，それは延長を持たぬ，延長の感覚も君等のうちにあるものだ。色も延長もないものの堅さなどはナンセンスだ。知るがいい，この世には自分の観念以外には何一つ存在しはしないのだ。」[5] アランは，よほどこのバークリーという御仁が腹に据えかねたようだ。彼はあちこちで，折にふれ再三再四，この観念主義者をからかっているが，まとめるとおよそこうである。

世界が実在するということは，何よりもまず，テコでも動かぬ物がある，非情な自然がある，ということだ。たえずわれわれが，それに立ち向い，それに働きかけなければならない物が，自然がある，ということだ。自ら手足を動かすことなく，ただ漠然と観照している者に，世界はついにその姿を現さないだろう。仕事により，労働によってこそ，われわれは真に世界に触れ，世界を知る，と言える。ところで，あのお偉いバークリー僧正は，いったい自分の手足を労して何かしたことがあるのだろうか。彼は「この世界は，われわれの思考の中の，絵像 imagerie でしかない，と確信していた。この世界とは，彼にと

って，僧正の晩餐でしかなかった」[6] のだ。彼の夕食は，いつもすっかり出来上って，目の前に運ばれてきた。布教のために新大陸に渡り，失敗してそこから戻ったのはよかったが，相変らず，外界の実在——アランは「事物の荒々しい実在」la rugueuse existence des choses[7] と言っている——を信じようとしなかった。われわれの知覚は実体を持たない，と相も変らず思いこんでいた。だが，それもやむを得まい。彼は，水夫たちが，懸命に帆を上げたり，荷を上げ下ろししている間，ただ手を束ねて，漫然と船旅をしていたのである。彼の僧正としての仕事は，もっぱら口で人を説得することにしかなかったのである。

くり返したい。世界があるということは，われわれの主観とは截然と異ったものが存在するということだ。理屈をもってしては，如何ともしがたいものがある。確かな対象が，頑強な抵抗体が，自然が存在する。小林秀雄の言葉を借りよう。「自然が僕を取巻いてゐるのです。又，僕の肉体といふ自然が，水も洩らさぬ様に僕を取巻いてゐるのです。この堅固な客観の世界は僕が望んだから在るものではないのだ，まして僕の望み通りにどうでもなる様な世界ではないのである。」[8] こうした世界を知覚することなしに，正しい思考はない。この堅固な外界にしっかりと支えられて，はじめて，われわれは明瞭にものを考えることが出来る。いや，もっとはっきり言おう。およそ「世界の事物を離れて，われわれは何事も思考しない。」Hors des objets du monde nous ne pensons rien.[9] と。

「私はいつも世界に立ち帰る。というよりむしろ，私は常に世界にいて，そこに触れている。」Je reviens toujours au monde, ou plutôt j'y suis toujours, et au contact.[10] かく言うアランにもまして，筆者に親しいアランはいない。これほど心強い，たのもしいアランはいない。彼はまず黙って，この世界を受け入れる。すべての存在を前にして，まず脱帽する。「存在するものを愛すること。」aimer ce qui existe.[11] まことに，アランにもまして大き

く外界に向って，自然に向って開かれた精神は，ほとんど類を見ない。彼の作品の中には，驚くほど豊饒な自然がある。「自然は私の一切の思考のキャンバスである」[12] と彼自身言うのだが，アランと自然の関わり，自然を踏まえた思索の具体については，その考察を次回にゆずり，ここでは彼の豊饒な自然の，自然を歌いたたえる詩人アランの，ほんのごく一端を紹介しておきたい。

ほんの一端とは言ったものの，さて何を選べばよいのだろうか。真実筆者は，宝の山を前にして，半ば茫然自失の呈なのである。ここには天地のすべてがある。日月星辰・海陸山川のすべてが，禽獣草木・有情非情のことごとくが，春夏秋冬・風雲雨雪のいっさいがそろっている。やむを得ないだろう。紙面も限られている，と思う。いづれにしろ立入った分析は次回以下「自然と生活」「自然と芸術」「自然と宗教」といったテーマを立てて行うこととし，ここは筆者の好みで，二・三の例を上げて，いっときを糊塗するしかすべはないようだ。ごく楽しいものを引いておきたい。

くよくよと思い悩む者に，快々として楽しまぬ者に，アランは，遠くを見よ，うっすらと緑にけぶるあの地平線に眼を遊ばせるのだ，と進言する。アラン一流の幸福論である。「気分がふさいで晴れない人に，私が言いたいことは一つしかない。すなわち，〈遠くを見よ〉 Regarde au loin. たいてい，鬱々と楽しまぬ者は，活字中毒患者だ。人間の眼は，そんな近距離に合うように作られてはいない。それは広々とした空間に注がれて，はじめて安らぎを得る。空の星や海の水平線を眺めれば，君の眼の緊張はすっかりとれる。眼が和(なご)めば，頭は自由になり，足どりも一段としっかりする。体全体がくつろいで，内臓まで穏やかになろう。」[13] アランは汽車に乗る。しかし彼は，直ちに新聞を広げたり，雑誌のページをくったりしない。いらいらして，煙草を吸ったり，腕時計を何度も眺めたりしない。あくびをしたり，スーツケースを開けたり閉じたりはしない。「汽車の中ほどいいところはない。（中略）広い窓からは，川や，谷や，

丘や，村落や，町が次々と通り過ぎるのが見える。眼は，丘の中腹の道や，その道路を走る車や，川に浮ぶ舟の列を追う。大地の富がことごとく展開される。あるいは小麦やライ麦畑，あるいは甜菜畑や精糖所，それから見事な大木の森，そして，牧草地や牛や馬。切通しにさしかかると，地層が見える。これこそ，素晴らしい地理のアルバムだ。ページをめくる面倒はいらないし，季節や天候で，毎日変化する。低い山並の彼方で雷雨の気配がする。秣(まぐさ)を積んだ車が道を急いでいる。刈取りをする人たちが，金色の埃の中で立働き，空気が陽光の中で振動している日もある。これほどの光景がほかにあるだろうか。」[14]

アランは降る雨を観察し，さまざまの風の音を聞き分ける。小鳥のさえずりに耳を澄まし，その飛翔をいつまでも眼で追いつづける。彼は好んで鳥を，生動する自然の生命のエッセンスともいえる野鳥を描写する。その鳥を扱ったいかにも生彩に豊む文の中から，一つ引いておきたい。これは筆者の最も好きなプロポの一つでもあるが，ほとんど散文詩と言っても良い。題して「ディエップの突提」La jetée de Dieppe。ノルマンディーの古い港で，彼が目撃した光景である。たいして長くもないので，全文を訳出して掲げよう。未訳の作品ででもあるから。

「ディエップの突提で，私は鷗を捕っている漁師を見た。彼は，餌をつけた針を，長い釣糸の先につけて海面に漂わせていた。彼の明るい眼は，鷗の飛翔を追っている。鷗の群は，翼をゆっくりと打ちながら空中を浮遊していた。円い眼玉と首のない大きな頭部がはっきり見える。時々一羽が，まるで石のように，海中に突進し，ふたたび旋回しながら上昇した。素晴らしい上天気。はたはたと風に旗が鳴り，波の泡が踊っていた。白い航跡を残しながら，イギリスの船が遠ざかっていった。そこにはいつも見かける同じような人々が乗っている。帽子を押えているパリジャンたち。スカートを押えているパリジェンヌたち。赤ら顔の長身の英国人。我国ではたえて見ない緑の羅紗をまとった小柄な英国人。この動いてやまない画面，新鮮な色彩，生き生

きとした印象を，諸君は容易に思い浮べることができよう。というのも，君たちもまた一度ならず，鉄塔の蔭に風を避けたことだろうし，最も無精な者にも，不意に世界を旅してみたいという欲求を吹きこむ，あの泥とタールの匂いをかいだことだろう。

と，この時，空を漂っていた鷗が一羽，矢のように波の中に没したかと思うと，いやに重そうに羽ばたきながら上ってきた。私はすぐに漁師に眼をやった。男は勢よく，むらのない動きで，糸を巻いていた。周りで，騒いでいる見物人たち。私の眼は糸をたどって水に達し，鷗に行き当った。つかまったのだ。鷗はまだ飛んでいた。仲間にまじってまだ旋回していた。しかも一段と激しく羽を打ちながら。しかし私は，その開いたくちばしを，そして漁師が規則正しくたぐり寄せている，糸を見た。

鷗は今，あらん限りの力をふりしぼっていた。たけり狂った羽ばたきは，空の奥まで鳥を運んだかもしれない。しかし，このほとんど見分けがたい些細なもの（糸）は，重い獲物よりも重く，風よりも強かった。幾株かの麻が太陽のもので成熟した。職人の手が，その繊維を分ち，梳き，編みあげた。その間鳥は翼を試し，嵐と戯れていた。多くの曲折をへた後，糸と鳥は，同じ波のはざまで出会った。そうしためぐり合せにあったのだ。今や運命を読み取ることは容易だったが，鳥にとってはまだそうではなかった。いたずらに飛んだ後，鳥は，体を強ばらせて泳いでいた。だが，身内からおのずからわき上ってくる力は，もう働いていない。世界はもはや，一場の不可解な夢でしかなかった。今一度旋回しながら飛び立つ。荒々しく怒り狂った，しかし無駄な抵抗を爆発させる。一瞬後，鷗は翼を捕らえられた。眼だけがまだ生き生きと動いていた。男は，こうした間，ただ糸をきちんと巻くことしか考えていなかった。」[15]

小林秀雄からも少し引いておこうか。注意して読めば，小林の評論にも，意外と自然にふれた文章の多いのに気づく。例えば，「現代の人々の愛好する自

己主張といふ言葉は，自然との異常な断絶を背景としてゐる」[16] などといった言葉がすぐ頭に浮かぶのだが，小林の自然観，とでもいったものについては，その考察をこれも次稿以下にゆずり，ここでは一つ，いかにも楽しげな写生文を上げておきたい。彼にも，こんなほほえましい一面がある。おびただしい量に上る小林秀雄論のいづれにも，こんな文は一度も引かれたことはないし，これからも引かれることはあるまい，と思うので。

小林は，友達に作ってもらった四十雀の巣箱を庭の木にかけておく。毎年のように巣籠ることは巣籠るのだが，巣立ちの有様はなかなか眼に出来ない。さて，「今日はあやしいと思ひ，早朝から見張つてゐた。用事の人が来たが，その由を告げ，私は巣箱の方をむいたままで応対した。訪問客は，あきれたらしく，用談をすますと早々に帰つて行つた。昼過ぎになつて，巣箱の小さな丸い穴から，鳥の頭がひよいと出る。生れて初めてみる外界だ。さう思ふとこちらも息をのむ想ひである。容易な事では決心がつかない。親が烈しく鳴いて励ます。やつと意を決して飛び出すと，そのまま真つ直ぐに，十間ほどの距離を，正面のもちの木の梢まで，見事に飛行する。これが繰返されるのだが，やはり強い者から順々に出て来るらしく，飛び方はだんだん下手になり，終ひの方は，一と息にはとてももちの木までは行けず，途中の灌木や草むらの中に落ちる。親鳥は辛抱づよく世話をやき，もちの木の中に，総勢（八羽）が集まつて来るのを待つた。二時間ほどの間だが，それは実に優しく爽やかな，胸が踊るやうな光景であつた。」

もう一つだけ引用しておく。ごく短いのを。「年齢」と題した随想の一節だが，著者は当時四十九歳だった。自分は今まで年令をほとんど気にしたことはない。頭に白いものが混じるようになつても，年令が自分の内部に成就したものについては，無関心同然できた。「齢不惑はとうに過ぎ，天命を知らねばならぬ期に近付いたが，惑ひはいよいよこんがらがつて来る様だし，人生の謎は深まつて行く様な気がしてゐる。」という風に書き出して，「先年の秋，大原の寂

光院の辺りを歩いてゐて，嘗て何度も見た四囲の平凡な風物が，惚れるばかりの美しさで，目に映ずるのに驚いた。同行の三好達治君に，『俺は，近頃，こんな具合の自然の美しさが，骨身にこたへると言つたあんばいなのだが，どうしたわけだらう』と言ふと，『やつぱりそりや年だな』と彼は言つた。物言はぬ自然は，目に見えぬ心の年齢を一番鋭敏に映す鏡なのであらうかと私は思つた。』[18] アランの自然は，言ってみれば「大波小波の動きのなかに宇宙の四大元素の戯れをよく見届けよう」，[19] とでもいった趣があろう。それに比べると，小林秀雄の自然は，いかにも胸中の山水，胸中の自然，といった色合い濃いのであるが。

注

I

(1) Alain: Propos sur l'éducation (Presses Universitaires de France, 1957) p. 156

(2) Alain: Histoire de mes pensées; Les Arts et les Dieux (Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1958) p. 11

(3) André Maurois: Alain (Gallimard, 1950) p. 137

(4) Ibid.

(5) Alain: Histoire de mes pensées; Les Arts et les Dieux, p. 12

(6) アランの秀れた翻訳者でもある杉本秀太郎氏が，確か，この片目の馬と父親にふれて一文を書いておられた様に思うのだが，もし御記憶の方があれば，御教示願いたい。

(7) 白井成雄：ラニョーとアラン；中村弘訳『ラニョーの思い出』(筑摩書房，1980) p. 157

(8) Alain: Souvenirs concernant Jules Lagneau; Les Passions et la Sagesse (Pléiade, Gallimard, 1960) p. 713

(9) Ibid., p. 709

(10) Ibid.' p. 712

(11) Ibid.

(12) Ibid.

(13) Ibid., p. 721

(14) Ibid.

(15) Ibid.
(16) Ibid., p. 774
(17) Ibid., p. 775
(18) Ibid.
(19) Alain : Histoire de mes pensées ; Les Arts et les Dieux, p. 15
(20) 小林秀雄：批評家失格；小林秀雄全集第 1 巻（新潮社，1967）p. 169
(21) Alain : Souvenirs concernant Jules Lagneau ; Les Passions et la Sagesse, p. 722
(22) André Maurois : Alain, p. 14
(23) Alain : Souvenirs concernant Jules Lagneau ; Les Passions et la Sagesse, p. 753
(24) Ibid., p. 754
(25) Alain : Histoire de mes pensées ; Les Arts et les Dieux, p. 18
(26) Ibid., p. 15
(27) Ibid.
(28) Alain : Souverirs concernant Jules Lagneau ; Les Passions et la Sagesse, p. 758
(29) Ibid., p. 759

II

(1) 中村雄二郎：アラン著作集第一巻（白水社，1981）p. 422
(2) 小林秀雄：小林秀雄全翻訳（講談社，1981）p. 531
(3) Alain : Système des beaux-arts ; Les Arts et les Dieux, p. 217
桑原武夫訳：アラン・諸芸術の体系（岩波書店，1978）p. 1
(4) Alain : Système des beaux-arts ; Les Arts et les Dieux, p. 445
(5) Ibid.
(6) 小林秀雄：無常といふ事；小林秀雄全集第 8 巻，p. 26
(7) Georges Pascal : L'idée de philosophie chez Alain (Bordas, 1970) p. 57 以下同書から，二，三の有益な示唆を受けた。
(8) Alain : Histoire de mes pensées ; Les Arts et les Dieux, p. 59
(9) Alain : Les saisons de l'esprit (Gallimard, 1937) p. 34
(10) Alain : Quatre-vingt-un chapitres sur l'Esprit et les Passions ; Les Passions et la Sagesse p. 1071
(11) Alain : Histoire de mes pensées ; Les Arts et les Dieux, p. 137
(12) 小林秀雄：アラン「大戦の思ひ出」；小林秀雄全集第 7 巻，p. 100
(13) Alain : Systèmes des beaux-arts ; Les Arts et les Dieux, p. 262

(14) Alain : Histoire de mes pensées ; Les Arts et les Dieux, p. 138
(15) Georges Passal : L'idée de philosophie chez Alain, p. 61
(16) Alain : Systhème des beaux-arts ; Les Arts et les Dieux, p. 218
(17) Alain : Histoire de mes pensées ; Les Arts et les Dieux, p. 13
(18) 小林秀雄：本居宣長（新潮社, 1977) p. 19
(19) Ibid., p. 20
(20) 小林秀雄：常識について；小林秀雄全集第9巻, p. 321
(21) 小林秀雄：本居宣長, p. 88
(22) Ibid., p. 90
(23) 小林秀雄：好き嫌い；小林秀雄全集第12巻, p. 147
(24) Ibid., p. 149
(25) 小林秀雄：学問；小林秀雄全集第12巻, p. 187
(26) 小林秀雄：徂徠；小林秀雄全集第12巻, p. 191
(27) Ibid.
(28) Ibid., p. 192
(29) Ibid.
(30) Ibid.
(31) Ibid., p. 193
(32) 小林秀雄：物；小林秀雄全集第12巻, p. 263
(33) 小林秀雄：徂徠；小林秀雄全集第12巻, p. 196
(34) Ibid., p. 197
(35) 小林秀雄：考へるといふ事；小林秀雄全集第12巻, p. 211
(36) 小林秀雄：小林秀雄全翻訳, p. 869
(37) 小林秀雄：本居宣長, p. 39
(38) Marcel Proust : A la recherche du temps perdu, tome Ⅲ, (Pléiade, Gallimard, 1954) p. 12
(39) Marcel Proust : Contre Sainte-Beuve (Pléiade, Gallimard, 1971) p. 303

Ⅲ

(1) Alain : Propos (Pléiade, Gallimard, 1956) p. 33
(2) Ibid.
(3) Alain : Les Idées et les Ages ; Les Passions et la Sagesse, p. 65
(4) Alain : Histoire de mes pensées ; Les Arts et les Dieux, p. 76
(5) 江藤　淳：小林秀雄（講談社, 1962) p. 308
(6) Alain : Les Dieux ; Les Arts et les Dieux, p. 1229
(7) Alain : Mythologie enfantine ; Les Arts et les Dieux, p. 1123

(8) 小林秀雄：文学と自分；小林秀雄全集第7巻，p. 153
(9) Alain : Les Idées et les Ages ; Les Passions et la Sagesse, p. 15
(10) Alain : Souvenirs concernant Jules Lagneau ; Les Passions et la Sagesse, p. 743
(11) Alain : Propos, p. 32
(12) Alain : Histoire de mes pensées ; Les Arts et les Dieux, p. 75
(13) Alain : Propos sur le bonheur (Collection Idées, Gallimard, 1976) p. 131
(14) Ibid., p. 103
(15) Alain : Propos, p. 12
(16) 小林秀雄：信じることと知ること；小林秀雄全集別巻Ⅰ（新潮社，1979）p. 110
(17) 小林秀雄：四十雀；小林秀雄全集別巻Ⅰ，p. 56
(18) 小林秀雄：年齢；小林秀雄全集第8巻，p. 224
(19) 杉本秀太郎：雪（朝日新聞，1984. 1）